

[84] ヨハネによる福音書 20 章 1 節－10 節

「主の墓へ急ぐ」

《1》

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに」と始まっています。主イエス・キリストのご復活を告げる各福音書の始まりは、皆、似たような、ほとんど同じとも言えるような言い方で、始まっています。

今はそれらを見ませんが、後から見ていただくと、わかると思います。——それだけ、主のご復活を告げるにあたり、それが「週の初めの日」、つまり今の日曜日に起こったことなのだ、ということ、それぞれの福音書は強く訴えているわけですね。

この日曜日に、私たちは礼拝をささげています。それは、主イエス・キリストがこの日にご復活されたからです。そして、私たちの礼拝は何よりも、主イエス・キリストのご復活を祝い、喜ぶものです。

ご存知のように、ユダヤ教では土曜日に礼拝をしています。当初、ローマ帝国からもユダヤ教の一派と見なされていたキリスト教ですが、しかし、礼拝を行う日を変えました。日曜日とした。自分たちはユダヤ教のように、律法を守ることによって救われようとしているのではない、ということを目に見える形で変更しています。

主のご復活こそがすべてです。主の復活の命にこそ、私たちは生かされる。このことが日曜日に礼拝を行うようにしたことによって、まことに鮮やかに示されています。

さて、その週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアはイエスさまの墓へと行きました。すると、墓の入口の石が取りのけてあります。

彼女はこの時、墓の中を覗き込んだのでしょう。ヨハネ福音書には、そうとははっきり書かれてはいませんが、この後、ペトロたちに告げた話の内容から、そのように考えられます。また、ほかの福音書では、彼女が墓の中に入ったことが明確に記されています。

マリアはすぐに、シモン・ペトロのところと、もう一人のイエスさまが愛しておられた弟子（ヨハネのことでしょう）のところに行って、言いました。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、私たちにはわかりません」。

「私たち」と言っています。墓を訪れた女性はマリアだけではなかった。マルコ福音書によると、マグダラのマリアのほかに、ヤコブの母マリア、サロメも墓を訪れたようです。

いずれにせよ、彼女あるいは彼女たちは、ここでイエスさまの復活のことなど、何も知らないでいます。イエスさまの遺体が、墓から取り去られてしまった。誰が、どこに、持って行ってしまったのか、何もわからない。どうしたらよいのか。途方に暮れて、弟子たちの筆頭であるペトロのもとへ、また、主が愛された弟子のもとへと、走ってきたというわけです。

話を聞いた二人は、早速外へ出て、墓へと向かって行きました。

二人は一緒に走って行きました。しかし、恐らくそれほど若くはなかったかもしれ

ないペトロは、非常に若かったであろうヨハネに後れを取ります。ヨハネのほうが早く走って、先に墓に着いた。

しかし、彼は身をかがめて墓の中を覗き込んだが、中へは入らなかった。それで、後から来たペトロが先に墓の中に入りました。

このへんの描写は、いかにも臨場感があって、面白いですね。主のご復活という大変驚くべき、そして喜ばしい出来事を前にして、弟子たちはどのように行動したか。そのあたりの細かなことを、書き残しているということでしょう。

では、なぜ先に着いたヨハネはすぐに中に入らなかったのか。少し怖かったのかも知れません。猪突猛進型のペトロは、そのまますぐに入って行きました。

あるいは、ヨハネは年長者であるペトロに敬意を表して、彼を先に行かせたのではないか、ということかも知れません。

こうして、二人が中に入って、そこで確認したのは、――亜麻布が置いてあったことと、イエスさまの頭を包んでいた覆いは、離れた所に丸めて置いてあった、ということでした。

これが意味していることは、遺体は誰かが持ち去ったとは考えられない、ということでしょう。遺体を持ち去るなら、わざわざ遺体を包んでいた亜麻布を残したり、頭の覆いを丸めたりは、しないはずです。

では、一体、何が起こったのでしょうか。

《2》

これはもう、今の私たちはすぐにわかりますね。主イエス・キリストのご復活です。聖書の見出しのゴシック文字（これは聖書本文ではありませんが）にも、「復活する」と書かれているので、考えるまでもないほどのことです。

復活ということで、そのとおりなのですが、しかし、ここをあまり簡単に、そうやって素通りしてしまってよいのか、という問題は残ります。

つまり、空の墓がある。それで、復活、と直結するのか、ということですね。これだけでは、多少飛躍があるとも言えるでしょう。

なぜなら、イエスさまを包んでいた亜麻布が置かれていたから、遺体は奪い去られたのではないだろう、といっても、あくまでそれは推測です。あまり考えにくいことかと思いますが、遺体を取り去った者が亜麻布は残していった、と考える余地もあるでしょう、なぜそうしたのは殆ど推測できませんが。

そして、何よりもこの時のペトロとヨハネの気持ちに即して、このところを見る必要があるでしょう。

そこで考えなければならぬのが、8節と9節の御言葉です。8節「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」。

やはり、信じたとあるではないか、復活を信じたのではないか、となるかも知れません。

しかし次の9節です。「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」という聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである」。

この 8 節と 9 節は、ふつうに考えれば、うまくつながりません。学校の作文では、零点になるかもしれない。こうではなくて、——聖書の言葉を理解していなかったの、信じなかった、とか、聖書の言葉を理解していたので、信じた、というのであれば、ふつうに通じます。

しかし、聖書は、こういう書き方をしています。そして、これが全く正しい書き方であるわけです。では、私たちはどう理解するか、です。

その前に、ここにある「聖書の言葉」とは何を指しているか、という問題があります。福音書で「聖書の言葉」というときには、だいたい旧約聖書を指しています。それで、これは詩編 16 編 10、11 節の御言葉であろう、と考えられるところです。「あなたは私の魂を陰府に渡すことなく、あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず、命の道を教えてください」。

さらに、ここでの聖書の言葉という中には、少し異例かもしれませんが、イエスさまご自身の御言葉のことを考えてもよいのではないのでしょうか。主は地上の生涯において三度、ご自身の死と復活を予告されました。

例えばルカ福音書 18 章 32、33 節「人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を鞭打ってから殺す。そして人の子は、三日目に復活する」。

このときも、これを聞いた弟子たちは、何もわからなかった、と続けて書かれています。その何もわからない状態が、今も、続いているということですね。

そのような、わからない状態、理解できない状態の中で、特にヨハネについて、彼は入って来て、見て、信じた、と言われていました。

ですから、では、そのとき、そこで信じたというのは、どういうことなのか？ 何を、どのように、信じたのか、ということです。

考えて見ますと、信じるという言葉は、かなり広い範囲で使われる言葉です。

よくアンケートのようなもので、“あなたは神を信じますか”という紋切り型の問いかけがあります。この時に意味されているのは、神という存在があることを認めますか、というほどのことでしょう。

それで、その時の答えとして、——この世に起こる事柄はとて人間常識だけでは理解できないようなことがいっぱいあるから、神とでも呼ぶべき存在があるのではないかと、自分は信じます、というのでも、「信じている」ということになるでしょう。

しかし、そのような人間を超えた何らかの存在があると、頭で納得しているだけのことで、とて信仰とは言えません。

信仰がきちんと信仰であるためには、この世を創造され、私たちに救ってくださる神さまを信じること。それは、ただ私たちが愛してくださるがゆえに、そのように創造され、救ってくださる御方であることを、信じることです。

そして、信じるというのは、これを頭の中で理解するだけではなくて、心からその御方に拠り頼むこと。普段から、その御方の導きと助けを祈り求めつつ、喜んでこの御方と共に生きること。これがあってこそ、信仰と言えます。

このときのヨハネにしても、ペトロにしても、「信じた」というのは、ここで、普通

の人間の理解を超えた、考えられないような素晴らしいことが起こっている、というようなことでしょう。また、その限りのことです。

救いと命、そして愛といったことがここに溢れていることを、彼らはまだ知りません。信じていません。

墓からいなくなられた主イエス・キリストに、心からの信頼を寄せ、この御方と共に生きていこうとは、彼らは考えていません。信じていません。

ですから、そのことを端的に、今日の最後の御言葉が告げています。

10 節「それから、この弟子たちは家に帰って行った」。これほどの事実を見ながら、そのまま家に帰りました。

ちょうど勤め人が仕事が終われば、やれやれ今日も大過なく一日が終わったという思いで自分の家に帰るように、帰って行きました。まるで特筆すべきことは何もないかのように、帰って行った。

ですから、二人は復活のことを、ここで信じてはいないのです。驚くべき何かが起こっていることは信じている。しかし、自分の生き方をすっかり変えてしまうほどの命の輝きがあることを、まだ知らずにいます。

もし復活を信じたなら、来たときと同じく、あるいはそれ以上に速く走って、喜んで、そのことをほかの弟子たちに伝えたりしたでしょう。そうはしていません。彼らがとぼとぼと家へと向かう姿が思い浮かびます。まだ復活を信じていないからです。

それは、この後の彼らの行動からもよくわかります。19 節以下に、その日の夕方、弟子たちの様子が描かれています。彼らはユダヤ人恐れて、家の戸に鍵をかけ、隠れるようにして息をひそめていた。

とても、主のご復活を知った者、経験した者の姿ではありません。彼らは、復活の主が彼らを訪れてくださったことによって、初めて知ったのです。復活を信じました。

恐れが喜びに代わりました。復活の事実が、彼らのすべてを変えました。

《3》

ただし、これらのことを知るまでには、弟子たちにとっては、もう十数時間ほどを要しました。

今日の個所では、まだその予兆が見えるだけです。

何か凄いことが起こっている。既に彼らはそのことを感じていましたが、それをはっきりと知って、それが現実の力となって彼らを動かすには至っていません。

しかし、今の私たちは違います。主のご復活の力を知り、恵みを知り、この力と恵みに生かされています。

主イエス・キリストは、甦られて、今も生きておられます。ローマの信徒への手紙に「死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死はもはやキリストを支配しません」とあるとおりです（6 章 9 節）。

主イエス・キリストにあるまことの命に支えられ、生かされて、私たちは歩み続けます。

主にあって真実の命に生かされて、真実の命と希望と喜びに、私たちは生きるので

す。

2021年6月20日 朝拝

恵みと憐れみに富みたもう天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

主イエス・キリストは死の束縛に捕らえられてはいません。死を打ち破り、確かな命へと復活されました。ここに救いがあり、希望と喜びがあります。

どうか、主のご復活を深く心に覚えて、いよいよ主の恵みと御力に抛り頼む者でありますように。

そして、復活の命に強められ、支えられて、私たちの歩み、教会の歩みが、いよいよあなたの恵みに生かされ、恵みを喜び、恵みを証しするものとされますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司